Page４：本論「両義」

SNSは、私たちの社会に計り知れない変革をもたらしました。誰もが自由に情報を発信し、世界中の人々と繋がれるようになったこのツールは、まるで魔法のようです。しかし、その「魔法」には、光と影、二つの側面が深く織り交ぜられています。SNSは、真実を広める力と、虚偽を拡散する危険性を同時に内包する、まさに「両義的」な存在なのです。

**1.SNSの両義の顔**

**光の側面：民主化された情報空間と新たな連帯**

SNSがもたらした最大の恩恵は、情報発信の民主化です。かつてはマスメディアが独占していた情報流通の主導権が、個人へと移り、誰もが自分の意見や体験を発信できるようになりました。これにより、私たちは既存の権力や権威に縛られない、多様な視点に触れることが可能になりました。

例えば、災害時にはSNSを通じて安否情報や避難所の状況がリアルタイムで共有され、人命救助に役立つこともあります。また、社会的な不正や問題が個人の告発によって明るみに出ることも珍しくありません。SNSは、声を上げられなかった人々にプラットフォームを提供し、国境を越えた連帯を生み出す力を持っています。

**影の側面：虚構の蔓延と分断される社会**

しかし、この自由な情報空間は、同時に大きな危険もはらんでいます。誰もが発信者になれるということは、情報の真偽を誰も担保しないということです。この構造は、悪意のある意図や単なる誤解から生まれた「フェイクニュース」が、瞬く間に拡散する温床となります。感情に訴えかける扇情的な情報ほど拡散されやすく、その結果、虚偽の情報が真実として扱われてしまう事態が頻繁に起きています。

さらに、SNSのアルゴリズムは、私たちの興味や嗜好に合わせて情報を最適化します。これにより、私たちは自分と似た意見を持つ人々とばかり繋がり、異なる意見に触れる機会を失います。この「エコーチェンバー現象」は、意見の極端化を助長し、社会の分断を加速させます。多様な意見を排除することで、集団内部の考えがどんどん過激になり、建設的な議論を困難にしているのです。

**真実と虚構を見分ける力、そして健全な情報社会へ**

SNSは、真実を伝える力と、虚構を拡散する力の両方を持っています。この二面性を理解した上で、私たちはどのようにSNSと向き合っていくべきでしょうか。

重要なのは、受け取った情報を鵜呑みにせず、自ら真偽を見極めるリテラシーを身につけることです。そして、異なる意見を持つ人々との対話を避けず、多様性を尊重する姿勢を持つことが、健全な情報社会を築く鍵となります。

では、この「フェイクニュース」がなぜこれほどまでに広まりやすいのか、その心理的なメカニズムについてさらに掘り下げていきます。

**2.Fake SNS**

**なぜフェイクニュースは広まるのか？：人間の認知バイアスと情報環境の力**

フェイクニュースの拡散は、単に情報リテラシーの低い人が騙されるという単純な話ではありません。そこには、人間の認知バイアスという、誰もが無意識に持っている思考の癖と、SNSという情報環境の構造が深く関わっています。

**1. 認知バイアスが真偽の判断を歪める**

認知バイアスとは、人間が限られた情報の中で効率的に判断を下すために、無意識的に行ってしまう思考の偏りのことです。行動経済学者のダニエル・カーネマンが著書『ファスト＆スロー：あなたの意思はどのように決まるか？』（早川書房、2012年）で提唱した「システム1（速い思考）」と「システム2（遅い思考）」の概念が、このメカニズムを理解する上で非常に役立ちます。

システム1（速い思考）: 直感的で感情的な、自動的な思考。多くの日常的な判断は、このシステム1によって行われます。

システム2（遅い思考）: 論理的で熟慮を要する、意識的な思考。

フェイクニュースは、このシステム1に強く訴えかけます。特に、以下のような認知バイアスが悪影響を及ぼします。

確証バイアス: 自分自身の意見や信念に合う情報を無意識に探し、それに反する情報を無視したり軽視したりする傾向です。SNSでは、自分と似た意見を持つアカウントをフォローしやすいため、このバイアスが加速されます。

利用可能性ヒューリスティック: 繰り返し見聞きした情報を「正しい」と認識してしまう傾向です。フェイクニュースは、SNS上で繰り返し拡散されることで、その内容が正しいかのように脳にインプットされてしまいます。

バックファイアー効果: 自分の信念と矛盾する情報に直面した際、かえって自分の信念を強めてしまう現象です。たとえフェイクニュースが訂正されても、逆にその情報を信じる気持ちが強くなってしまうことがあります。

フェイクニュースは、これらの認知バイアスを巧妙に利用し、私たちの理性（システム2）が働く前に、感情や直感（システム1）に訴えかけることで、真偽の判断を鈍らせるのです。

**2. SNSの構造が拡散を加速する**

フェイクニュースが広まる背景には、個人の心理だけでなく、SNSというプラットフォームの構造的な問題も深く関わっています。

フィルターバブル: イーライ・パリサー氏が著書『フィルターバブル：インターネットが隠していること』（早川書房、2016年）で指摘した概念です。SNSのアルゴリズムは、ユーザーの過去の行動履歴に基づいて、その人が好みそうな情報だけを表示するよう最適化します。これにより、ユーザーは自分と似た意見や価値観の情報にばかり囲まれることになり、まるで泡の中にいるかのように、異なる意見から隔離されてしまいます。

エコーチェンバー現象: 同じ意見を持つ人々がSNS上で集まり、互いの意見を増幅させ合う現象です。フィルターバブルの中で形成されたコミュニティでこの現象が起きると、特定の意見がどんどん過激化し、フェイクニュースのような不確かな情報も「自分たちの常識」として受け入れられてしまいます。

これらの構造は、フェイクニュースの拡散を「情報の偏り」と「集団心理」の両面から加速させます。

**3.なぜ感情的な情報ほど広まるのか？**

SNS上で拡散されやすいフェイクニュースには、共通した特徴があります。それは、感情を強く揺さぶる内容であることです。

追手門学院大学の増井啓太准教授らの研究（2022年）によると、未来に対する不安や恐怖を強く感じる人は、デマを拡散しやすい傾向があることが示唆されています。また、SNSにおける虚偽の情報は、真実の情報よりも感情的な要素が強く、結果として6倍も速く拡散されるという研究結果も報告されています。

このように、フェイクニュースは、私たちの認知バイアスやSNSの構造、そして人間の感情という複数の要因が複合的に作用することで、まるでウイルスのように社会に蔓延していくのです。

ではそんな情報が混じり錯綜した社会の今後はどのようになっていくのでしょうか？

SNSとフェイクニュースの関係は、今後も私たちの社会に大きな影響を与え続けます。技術の進化、特にAIの発展は、フェイクニュースの質と拡散力をさらに高める可能性があり、これまでの対策だけでは不十分になるかもしれません。

**4.AIが加速させる「真実の危機」**

今後のSNSとフェイクニュースの関係性を考える上で、避けて通れないのがAI（人工知能）の存在です。AI技術の進歩は、フェイクニュースの問題をより複雑で深刻なものにする可能性があります。

ディープフェイクの高度化: ディープフェイクと呼ばれる、AIによって生成された偽の画像や動画は、すでに現実と見分けがつかないほどの精度に達しています。これにより、政治家や著名人が実際には言っていないこと、やっていないことをあたかも事実のように見せる虚偽の動画が、簡単に作られ拡散されるようになります。

偽情報の「民主化」: かつては専門的な技術や知識が必要だった偽情報工作が、生成AIの普及によって誰でも簡単に行えるようになります。これにより、個人が特定の目的を持って、特定の人物や組織に対する悪意のある情報を大量に生成し、拡散するリスクが高まります。

アルゴリズムによる「分断の加速」: SNSのアルゴリズムは、今後もユーザーの興味・関心に合わせて情報を最適化し続けます。これにより、自分の見たい情報だけが届く「フィルターバブル」や、同じ意見を持つ人だけで固まる「エコーチェンバー」がさらに強固になり、社会の分断が加速する可能性があります。

これらの技術的課題に対し、SNS運営企業はファクトチェック機能の強化やAI生成コンテンツへの注意喚起ラベルの導入を進めていますが、その完璧な対応は難しいと予想されています。

**5.私たちがSNSとどう向き合うべきか**

このような状況下で、私たちがSNSとどう向き合っていくべきか。それは、情報の受け手として、そして発信者として、一人ひとりが意識を変えていくことです。

**①. 情報の受け手として：実践的な情報リテラシーを身につける**

フェイクニュースの脅威に対抗するためには、以下の実践的な情報リテラシーを身につける必要があります。

発信元を確認する: その情報が誰によって、どのような意図で発信されたのかを常に意識しましょう。信頼できるメディアや公的機関からの情報なのか、それとも匿名の個人アカウントなのかを見極めることが重要です。

複数の情報源を比較する: 一つの情報源を鵜呑みにせず、異なるメディアやプラットフォームで同じ情報がどう扱われているかを確認しましょう。複数の視点から情報を検証する癖をつけることで、情報の偏りや誤りを見抜くことができます。

感情に流されない: 特に感情を強く揺さぶるような情報（怒り、不安、恐怖など）に触れた際は、一度立ち止まって冷静になることが大切です。「これは本当に事実か？」と自問する「健全な懐疑心」を持つことが、フェイクニュースに騙されないための第一歩です。

一次情報にアクセスする: 引用や伝聞ではなく、元の情報源（論文、公式発表、元の映像など）を探して確認する習慣をつけましょう。

**②. 情報の発信者として：無責任な拡散に加担しない**

私たちは誰もが、気づかないうちにフェイクニュースの拡散に加担してしまう可能性があります。

「確信が持てない情報は拡散しない」: 少しでも疑わしいと感じた情報、真偽の判断がつかない情報は、安易にシェアしたりリツイートしたりしないようにしましょう。

修正・訂正の責任を持つ: もし自分が拡散した情報がフェイクニュースだと気づいたら、速やかに訂正し、その旨をフォロワーに伝える責任があります。

**3（追加）.なぜSNS事業者は問題を知りながら現状を維持するのか？**

では、これらの問題を理解した上で、なぜSNS事業者は根本的な構造変革に踏み切らないのでしょうか。その背景には、複雑なビジネス構造と企業の論理があります。

#### **ビジネスモデルの構造的矛盾**

#### SNS事業者の収益の大部分は広告収入に依存しています。この広告モデルは、ユーザーの「エンゲージメント」（いいね、コメント、シェアなどの反応）を最大化することで成り立っています。ユーザーがプラットフォームに長時間滞在し、より多く投稿やコンテンツに反応すればするほど、広告主にとって価値が高まり、SNS企業の収益も増加するのです。

しかし、ここに根本的な問題があります。人間が最も強く反応するのは、感情を激しく揺さぶるコンテンツです。怒り、恐怖、驚き、嫉妬といった強い感情を引き起こす情報は、冷静で理性的な情報よりもはるかに高いエンゲージメントを生み出します。つまり、フィルターバブルやエコーチェンバー現象、さらにはフェイクニュースの拡散は、SNS企業にとって「望ましい現象」なのです。

#### **アルゴリズムの最適化が生み出すジレンマ**

SNSのレコメンドアルゴリズムは、ユーザー一人ひとりの行動パターンを学習し、その人が最も反応しやすいコンテンツを表示するよう設計されています。この「個人最適化」は、一見するとユーザビリティの向上に思えますが、実際には深刻な社会的副作用を生んでいます。

例えば、ある政治的話題に興味を示したユーザーには、その方向性をより強化するコンテンツが優先的に表示されるようになります。これにより、ユーザーは自分の既存の信念を補強する情報ばかりに囲まれ、異なる視点に触れる機会を失います。企業にとっては「満足度の高いユーザー体験」でも、社会全体から見れば「情報の偏りと分断の促進」となってしまうのです。

#### **短期的利益と長期的責任の対立**

SNS企業の多くは株式会社であり、株主に対して短期的な利益成長を示す責任があります。フィルターバブルやエコーチェンバーを解決するような根本的なアルゴリズム変更は、短期的にはエンゲージメントの低下、つまり広告収入の減少を招く可能性が高いのです。

また、これらの問題の解決には、技術的課題だけでなく、大幅な人的リソースの投入が必要です。コンテンツモデレーション（投稿内容の審査）の強化、多様性を促進するアルゴリズムの開発、ファクトチェック機能の充実など、いずれも莫大なコストを伴います。

#### **規制と自由のバランス**

さらに、SNS企業は「表現の自由」と「有害コンテンツの規制」という難しいバランスを取らなければなりません。エコーチェンバーを解消するために強制的に異なる意見を表示することは、ユーザーの選択の自由を侵害する可能性があります。また、何が「真実」で何が「偽情報」かを判断すること自体が、検閲や言論統制につながりかねない危険性をはらんでいるのです。

#### **競争環境が生み出す現状維持**

SNS業界は激しい競争環境にあります。ユーザー獲得と維持のため、各プラットフォームは「より刺激的で魅力的なコンテンツ」を提供しようと競争しています。この競争構造において、健全だが刺激の少ないコンテンツよりも、感情に訴える刺激的なコンテンツの方が競争優位性を持ってしまうのが現実です。

一社が単独で「健全性重視」の方針に転換したとしても、他社がより刺激的なコンテンツを提供し続ける限り、ユーザーは競合他社に流れてしまう可能性があります。

〈まとめ〉

SNSは、これからも私たちの生活に深く関わり続け、その機能や形を変えていくでしょう。フェイクニュースという脅威は、AIの発展とともにさらに巧妙化し、社会の分断を深める可能性を秘めています。

しかし、SNS事業者のビジネスモデルや構造的制約を理解した上で、私たち一人ひとりがSNSを単なる便利なツールとして消費するのではなく、その光と影の両面を理解し、自らの手で健全な情報環境を築いていくという意識を持つことが、これからのデジタル社会を生き抜く上で最も重要な心構えとなるでしょう。

企業の論理だけに委ねるのではなく、社会全体で健全な情報流通のあり方を考え、実践していく必要があるのです。

次ページ→「自己」

参考文献

ダニエル・カーネマン『ファスト＆スロー：あなたの意思はどのように決まるか？』早川書房、2012年.

イーライ・パリサー『フィルターバブル：インターネットが隠していること』早川書房、2016年.

増井啓太ほか「SNSにおけるデマ拡散に関する研究」追手門学院大学、2022年.

Vosoughi, S., Roy, D., & Aral, S. (2018). *The spread of true and false news online*. **Science, 359**(6380), 1146-1151.